

---

**あなざー さーちんぐわーると (改・灰かぶりの英雄譚)**

ふみふみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなざー さーちんぐわーど（改・灰かぶりの英雄譚）

### 【Nコード】

N4537K

### 【作者名】

ふみふみ

### 【あらすじ】

異世界へとトリップしてしまったヘタレ高校生に課せられた使命は、異世界ガラキスタを滅ぼす事。どこまでも偉そうな自称下僕の神獣と共に世界を混沌の渦へ！？とゆるーカンジの話です。他作品、『さーちんぐわーど』と関係あるようないなような・・・合わせてよろしくお願いします。

## 1・主従関係っていつか(前書き)

前書き IDやらPWを書いたメモを無くしまして(汗)

手続きメンドイという理由で、ほったらかしにしております(・

ー ;)

すみません。

偶然、今更ながらメモが見つかったので他のIDで書いていたものを、こちらに持ってきました。

## 1・主従関係っていつか

あららららら？

ぬくぬくとしたぬくもりに包まれている俺。

視界は真っ暗というか、真っ黒？！

目を開いてるはずなんだけど、俺の瞳には何も映らない。

「えっ？あれあれ？こっつて・・・俺の部屋か？」

疑問を声に出してみると、俺の体を包んでいた毛皮がもぞもぞと動き視界が開けて、

それに答える声が。

「主よ、起きたのか？・・・主は、ずいぶんと足が短いな。」  
はあ？

初対面で足が短いつて・・・。

失礼な声だな。

どこのどいつだ？

俺は、声の聞こえてきた方向に顔を向けた。

そして、目があった。

そこにあるのは、全身を艶のある黒い毛に覆われた犬だか狼だか分からない顔と姿。

なにより、驚くのはその大きさで、俺の体をすっぽりと包みこんで丸まっているその姿は2mを優に超えている。

「いつ、犬がしゃべったあつ！！！」

「犬ではない！失礼な主だな。」

犬だから、表情は変わってないんだが、それでもむっつとしてるのは分かる。

そんなのこつちだつて言いたい！

俺は今時の標準的日本人体型だぞ！

背は低いけど、胴長短足とは言われた事ないのに！！

こうして、俺と犬は初の対面をしたのだった。

俺の名は、生島秋久<sup>いくしまあきひら</sup>。17歳。

身長165cmに中肉中背。顔の作りは、可もなく不可もない。どこまでも普通が似合う。その他大勢顔。

東京は荒川沿いに住む、下町の人間で現在高校生だ。

つて、事は置いといて、現状把握をしなければ。

「主つて何のことだ？それに、犬じゃなかったら何なんだよ？」

俺は犬に向かって訊いた。

犬は俺を見ると、あからさまな溜息。

大きな口からはケモノ臭が……。

くさっ！

「我は、神獣エオリア。主と共にこのガラキスタを滅する為にやってきた。」

口の大きさに比例するケモノ臭に顔をしかめる俺に向かって、犬はどこまでも偉そう。

ん？

今、なんだか重要ワードを聞いた気がする。

「ガラキスタ？つてどこの国だ？」

首をかしげる俺。

「主は、異世界の人間ゆえ、ガラキスタを知らないのか。仕方ない、説明してやろう。」

「……。」

なんでこの犬だか神獣だかは、こんなに偉そうなんだ？

主という割に全く敬われていない俺は文句満載だったが、説明を聞きたいので口を開かず我慢した。

「この世界は、ガラキスタといくつかの国によって成り立っている。地球でも、日本でもない。そこまではいいか？」

日本でない？

イミガワカラナイデスヨ。

## 2・タダよりこわいものって・・・

神獣エオリアの説明によると、神様達はガラキスタという国を滅ぼしたいらしい。

けれど、神様自身が手を出してはいけないという決まりがあるそうで、そこで考えられたのが異世界から呼び寄せた人間を使って、ガラキスタを混乱させて自滅への道を歩ませるというものだったらしい。

なんで俺が、そんな宝くじに当たるよりもレアな人物に選ばれているのかは分からないが、当然こういった異世界にトリップした人間には特典がもれなくついてくるはず・・・魔法力がハンパないとか、とにかく最強設定があるのが普通だと思うんだよ。

「なあ、今の俺は最強だったりしないのか？」

説明をきいても実感はない。

夢なら早いとこ覚めてほしい。

「そんなものはない。主は、普通の人間と変わらない。首をはねられれば死ぬし。」

いや、首とかはねられたくないしっ。

「無理だろ。普通の人間に国ひとつ滅ぼせるとか・・・意味分かんないしっ。」

「主は普通の人間だが、我を中心に他の神獣達も全面的に協力してやるから大船にのつたつもりでいい。」

いやいやいやいやいやいや。

待ってくださいって。

「のれるかっての！・・・それに、神獣ってそもそも何？！」

そう、そこから説明シテクダサイ。

「神獣は、神の半分の力を受け継いだ獣だ。我以外にも数千から数万いる。」

おおっ。

エオリアみたいなの巨大な犬がそんなにいるのか?!  
俺、正直犬苦手なんだよなあ。

そんな猛獣使いみたいなマネできるとは思えない。

「すみませんが、他の方を探してもらった方がいいかと・・・」

「無理だ。滅ぼすまで帰れない。・・・安心しろ。主は、神獣に好かれる体質だからな。」

なにそれっ？

そんな体質、返品したいんですけど。

「普段は、我が代表で主の身を守るっ。」

「あゝ。それは、それは。助かります・・・なんて言うわけないだろ。」

俺は、納得いかない。

どー考えても俺、被害者。

故に、強気。

「エオリアの目には、国を一個滅ぼせるくらい、俺ってそんな強そうとか頭よさそうに見えるのか？」

「主は、足は短いし頭もよくなさそうだし強くもない。」  
うぐっ。

ヒドス。

同じ人間同士だったなら、もれなく不仲がついてきますっつてんだ。

「それが人に物を頼む態度なのか!?俺は嫌だからな!」

ふんつと俺はエオリアから目を逸らした。

「何を怒っている?主に拒否権はない。」

「.....」

「やれやれ。主は我儘だな。・・・これをやるから機嫌をなおせ。」

「そう言っつてエオリアは、どこから出したのか金色に輝く何かを口に咥えている。」

このまま無視しててもしょうがないので、俺はエオリアが咥えるその何かを手を取った。



「……仮面？」

そう、どうみても金色に輝く物体は仮面に見える。

金属だからさぞかし重いだろうと思っていたが、結構軽い。

500mIのペットボトルよりも軽い。

つてことは、純金じゃなくてメッキかな。

「そうだ。この仮面をつければ少しの時間だけ、神の力を借りることがができる。」

「神の力？」

「主はそういうのが欲しいのだろうか？ 我は薦めぬが、仮面をつけば主に勝てる者はこの世にいない。」

おっつ。

そんな便利グッズもあるのか。

俺は、エオリアからもらった仮面をしっかりと胸に抱く。

### 3・性別 男

「ガラキスタを滅ぼすにあたって、まずは何をしたらいいんだ？」  
もうこの際、俺はやけっぱちな気持ちになっている。

この国をとつと滅ぼして俺は日本に帰るんだ。

確かもうじき、期末テストだってある。

こんな異世界で、いい旅夢気分味わってる場合じゃない。

俺は、ラグみたいに敷いてるエオリアの黒毛をぎゅぎゅう掴む。

そう、今の俺の態勢は巨大な熊みたいな大きさの犬（神獣）が体を丸めて横になっっているその上にごろんと寝そべっている。

かなり気持ちいい。

「決まっている。人間は金を稼ぎ、食事をせねば死ぬ。

主が今からしなければいけないのは、職探しだ。」

何いってるんだかって感じでエオリアが言う。

「えっ?!そこらへんのフォローはないの?」

マジでか。

右も左もわからないガラキスタで職探し……。

言葉通じるのかな?

「無論ナイツ!安心しろ。ガラキスタの言葉は分かるし話せる。

我も人の姿でつきあってやるう。」

そう言つて、エオリアが呪文みたいな言葉をうにゃうにゃ呟いた。

どどーんっ!!

エオリアの体が光って爆発した。

「おわっ!!!」

突然弾けたエオリアの上に乗っていた俺は、真上にふっ飛ばされた。  
し、死ぬっ!

助けて!!!

ヒュルヒュルと落ち葉のように回転しながら、地上に向かって落ちる俺。

怖くて目をギョツと瞑る。

あゝ。

なんて儂い俺の一生。

異世界で人知れず迎える最後なんて悲しすぎる。

飛び降り自殺したみたいに、潰れたトマト状態になった自分を想像してしまった俺は震えが止まらない。

.....

あれっ？

あれれ？

けれど、いつまでたっても俺が地面にたたきつけられる事はなかった。

それよりも、人肌のぬくもりにすっぽりと包まれてるような.....？

恐る恐る目を開けた俺の目に入ったのは.....。

「お、女っ?! エオリアって、メスだったのか!!」

そう、俺の体を軽々とお姫様抱っこしているのは人の姿になったエオリアだった。

しかも、全裸!

彫刻の様な欠点のない造形の顔だちはどこまでも無表情。

白磁のような透明感のある肌に、ウェーブのかかった金髪が腰まで伸びている。

メロンサイズの巨大な胸が顔に触れる。

美人なお姉さんに全裸でお姫様抱っこされてる俺。

状況を知ったとたん、俺の意思とは別に鼻から伝う一筋の生温かい液体が.....。

「主よ。鼻血がでていぞ。」  
「エオリアは変わらぬ無表情で俺の鼻血を舌で舐めて拭き取ってくれ  
る。」

なんだろう、この状況。

生まれてこの方、彼女ナシ。親にもやられた事のない行為に……  
……俺は啼いた。

#### 4・きれいなおねえさんは・・・キライです

「お、お、降ろしてっ!」

「分かった。」

涙声で訴えた俺をエオリアは、パツと手を離して落とした。

どんっ!!

むちゃくちゃ痛い。

衝撃が骨まで響いて痺れとも痛みともつかないショックに膝を抱える俺。

頭は何かぶつけずにすんだが腰を強打した俺をエオリアが上から見下ろしている。

「俺は降ろしてくれって言ったんだ。落とすと降ろすは違うの!」

エオリアを睨み付けようと見上げたが、それはエオリアの巨乳に妨げられてしまう。

「何?我は、主の言う通りに降ろした。何も問題はない。」

乳に遮られて俺の角度からエオリアの表情は見えない。

見えてもきつと変わらぬ無表情だろうけど。

「さあ、主よ。夜も明けた事だし、職探しの為に町へ行くぞ。」

今、俺とエオリアは町を一望できる小高い丘の上にいる。

周りには木が無く、隠れる場所がない為、ここを住処にしている動物もいない。

短い芝があるだけのこの場所から、遙か下の方に民家が集まっているのが見える。

エオリアは、職を探す為に町へ行こうというが、今の俺達の状態で行ったら町まで入れるのかすっごく疑問。

俺は、寝間着姿の黒い半袖Tシャツに赤い短パン。

髪だって最後に日本で風呂に入った記憶があるって事は、鏡見なくともタオルドライした寝癖ボウボウの頭だろう。

一方のエオリアだって全裸だから、充分俺と張り合えるレベル。

寝起きのボサボサ頭の平凡な日本人と、ビーナスが実写でいたらこんな感じだろう全裸な金髪美女の二人組。

あやしすぎるっ！

俺が経営者なら話を聞く事すら断るな。

せめて、全裸は何とかしなければっ。

俺の品格すら疑われかねない。

「一生のお願いです。どうか、服を着てください。」

俺は祈りのポーズで両手を組んで必死のお願い。

それをエオリアは遥か頭上から見つめている。

「仕方ない。主がそこまでお願い願うのならば、下僕として従わねばな。」

しかし、この世界の住人はどんなモノを着ているのか？

「それを俺に聞きますか。」

「そうだな。主の頭では答えられないな。すまなかった。」

なんだか、どこに文句を言っつていいやら分からなくなった俺。

細く長いエオリアの白い生足にひしとしがみ付いて嘆願する。

「なんでもいいからっ。とにかく裸はやめて！」

「わかったから、足にしがみついて泣くのはやめろ。」

塩で肌が荒れる。」

そーゆー問題でもないと思うんだが、とにかく服は着てくれるらしい。

エオリアは、再びうにやうにや呟いた。

今度は爆発に巻き込まれないように距離を確保。

すると突然俺とエオリアを取り囲んで風の渦が巻き起こる。

エオリアとくつついていれば台風の目にいれたのだが、前回の失敗の対策としてエオリアから距離を取ったせいでまんまと俺は渦巻く

台風部分に吸い込まれていった。

「ひいつ〜っ！！助けて〜！！！」

竜巻に巻き込まれた俺をエオリアが無表情に見上げる。

「やれやれ、世話の焼ける主だな。」

## 5・拾われ者には福がある

ふと目を覚ますと、俺はなぜかベッドに横たえられていた。

掛け布団をめぐってみると、さっきまで身につけていたTシャツも短パンも姿を消し、洗いざらしの綿でできた上下を着ていた。

部屋は寝室なのか、ベッド横に小さなチェストがひとつ。

部屋の広さは、4〜5畳くらい。

こじんまりとはしているが、一面を木板で囲まれた、雑貨屋みたいな趣のある部屋だった。

部屋の主は、おそらく女性。

最後の記憶を辿ると、エオリアによって起こされた竜巻によって一瞬のうちに遙か上空へと打ち上げられたような……。

そーだ。

そーだよ。

あの後、何がどーして今ここにいるんだ？

さっぱり記憶の飛んだ頭で考えてみるも、答えなど分かるはずもない。

ゆっくりとベッドから這い出て、ふらつく足で踏ん張って立つ。

ズボンの丈がだいぶ長い。

裾を踏み踏み、前に進む。

「……さてと。」

俺は部屋に唯一ある木の扉に手をかけた。

扉は鍵などはかかってはおらず、すんなり開く。

「おや。やっと起きたのかい？」



「体は大丈夫ですか？」

俺を迎えたのは、白髪のお婆と赤みがかった茶髪の同い年か少し年下の少女だった。

「は、はいっ。ありがとうございます。」

緊張して勢いよく体をくの字に曲げた俺に二人は驚く。

「もう大丈夫みたいですね。今から朝食なんですけど・・・食べられそうですか？」

少女が訊くのを俺はしっかりと頷く。

腹はかなり減ってる。

エオリアの姿が無いという事は、打ち上げられてどこかに倒れてたところを助けられたのだろうか？

少女が食事の準備をしている間、居間らしき部屋にはお婆と俺の二人きり。

「すみません。どうして俺がここにいるか話してもらえませんか？」

お婆は、ぬぼっと立つ俺を上から下まで何度も見て、はあとため息むっ。

なんだか失礼な態度だな。

そんな思いが表情に出たのか、お婆は口元に僅かに笑みを浮かべる。

「じろじろ見てすまなかつたね。どうやら、害はなさそうだ。」  
害って・・・。

お婆は俺に椅子に座る様に言った。

「お主は、森の外れに倒れていた。」

リアが、まだ息のあるお主を引き摺って連れてきたんじゃ。着ていた服はそんなわけで洗っておる。」

どうやら先程の少女は、リアという名前らしい。

俺の命の恩人。

リアにはどんな感謝の言葉でも足りない。

「私らが知ってるのはそこまで。今度はお前さんの番じゃ。名は何という？」

ギクッ！

まだこの国の事を分かっていない状態で本名を答えていいもんなのか……。

でも答えないわけにもいかないし。

下手に偽名を使ってもうっかりボロが出そうなのを考えて、俺は口を開いた。

「俺はアキといます。」

クラスメイトからもアキと呼ばれたりするからとっさに反応もできるし、

異世界の人間とバレバレな名前でもないよな？

「アキは何処から来たんじや？」  
うぐっ。

「難去つてまた一難。

どーする俺！

「……分かりません……」

「分からないとは？」

「……言葉の通り、自分が何処から来たのかはもちろん、何もかも分からないんです。」

嘘はついていない。

この国を滅ぼす為に異世界からやってきたけど、実際何をしたらいいのかわからない。

「記憶喪失か……リアも厄介な人間を拾ってきたもんだ。」

老婆は、やれやれって様子だが、先程のぶしつけな態度と比べてかなりその表情は穏やかだ。

何でだろう？

「おまたせしました。どうぞ、召し上がれっ！」

リアとシロばーちゃん（リアがシロおばあちゃんと言っていたので多分そう。）そして俺。

三人で食卓を囲む。

家族団欒ってかんじ。

俺は、物心つく頃から両親とも共働きでバリバリ働いてたので、こんな団欒を数えるほどしか経験してない。なんかいいな。

食事前のお祈りを見よう見まねでやった後、俺は早速空腹な腹を満たしにかかった。

野菜と何かの肉が、チリソースみたいな色のソースとからめられた料理へとフォークを伸ばした。

「う、うまいっ！」

思わず口をついた言葉にリアは嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます。そう言ってもらえると嬉しいです。」

「リアは町でも指折りのブルネリ食堂で働いてるのさ。リアの作る料理は癖になるだろう？」

シロばーちゃんも嬉しそうだ。

こくこく頷いて俺はスプーンでスープを掬う。

これまた美味い。

ブイヤベースもしつかりと味が出ているし、アクセントとして入っている胡椒みたいな香辛料が単調になってしまいがちなスープにメリハリをつけている。

バスケットに入った焼きたてのパンも、バターの香りが鼻孔をくすぐる。

異世界という事を忘れそうになる食文化に感激だ。

「すごいですっ！ホント、ごちそうさまでした。」

テーブルに頭をぶつけそうなほどにペコリと頭を下げる。

「アキさん。これからどうするんですか？」

リアが心配そうに声をかけてくる。

どうしよう。

食事に集中することで現実逃避していた俺は、途端現実を突き付けられて言葉を無くす。

そうだよな。

ここを出ていかなければ……。でも、エオリアとも離れ離れになった俺はどこに行っていいいやら途方に暮れる。

「よかつたらですけど……。ここで、三人で暮らしませんか？」  
「えっ?!」

予期せぬ言葉に俺は口をポカンと開けて間抜け面でリアを見た。

「なんで……。見ず知らずの得体のしれない俺なんかそんな親切なんです?」

何かあるんじゃないだろうか。

こんなうまい話があるわけない。

俺のこれまでの人生経験から、リアの申し出は何かの企みにしか思えない。

俺、金とか持ってないから、臓器を売られてしまつとか……。?

## 6・職活

「なんでって……それは……。」  
リアは口ごもる。

適当な理由を探すみたいに宙に目を向ける。

「アキ、お前さんの姿が行方不明の兄と被るからじゃよ。」  
シロばーちゃんが、渋々言った。

「リアの兄は、料理人を目指していたんだが、全く料理の才能がなかった。」

逆にリアは、料理の才能に溢れていた。次第に妹に対してひどくあたるようになってな……  
やがて町を出て行ってしまったんじゃ。

まだ仲がよかった頃、兄はリアの料理をよく褒めていた。さっきのアキと同じようにな……。」

リアは下を向いて床を見つめている。

ばーちゃんも、俺を見てはいるけど、その顔は俺じゃなくてリアの兄のものなだろう。」

しんみりした空気に俺はいたたまれなくなった。

リアの肩に手を置いて、パンパンと軽く叩く。

「しばらくの間、お世話になります。」

俺は深々と頭を下げた。

「アキさん……。」

「で、タダ飯するのもアレなんで仕事したいです。その食堂で働けないですか？」

「じゃあ今日、これから行って話してきますね。」

リアは、そう言って食堂で働く為に出かけて行った。

残された俺は、ばーちゃんに昔兄が使っていたという部屋へ案内された。

部屋は、掃除されていて汚くはないが、ずっと何年も時が止まって

いる気がした。

「ここがあんたの部屋だよ。兄のリキが使っていた部屋だ。」

「あ、ありがとうございます。」

「・・・それから・・・リアには手を出すんじゃないよ！もし出したら・・・」

ひいっ！

ばーちゃんの差し違えそうな眼差しにすくめられた俺は、気をつけをして、軍隊の人みたいに右腕を斜め上に持ち上げた。

「ハイッ！出しません！」

即答で叫んだ俺を見て、ばーちゃんは笑みをこぼす。

こうして、俺は寢床の確保に至った。

休み時間だと言って家に帰ってきたリアが嬉しそうに俺に伝える。

「近々、舞闘大会があつて店は人手不足なので、いつ来てくれてもいいそうです。」

嬉しそうなリアの笑顔に俺も笑みで返す。

「じゃあ、今日。今から行つてもいいかな？」

今日中に面接やつて、明日には働きたいし。

その前に俺つてバイトとか今までやった事ないんだけど・・・大丈夫かな？

俺は放任な両親に育てられたけれど、金に不自由した事はなくて・・・家の掃除すら清掃業者に依頼してたくらいに全く家事をやった事がない。

でも、この家では、年齢的にばーちゃんは働いてないだろうから、リアの収入だけで三人を養うのは大変に違いない。

家事はばーちゃんがやるとして、じゃあ俺は外から金を持ってこなければつてゆー使命みたいなものにつき動かされて、俺はリアと共

に店へと向かった。

恰幅のよい、オーナー兼店長であるタリムさんは、年の頃なら30代後半。

人好きのする笑みを浮かべて俺を迎えてくれた。

「はじめましてアキ。俺はこの食堂の店長をやってるタリムと言うところでお前、調理はできるか？」

「・・・いいえ。やったことないんです。」

「じゃあ、フロアー経験は・・・」

「スミマセン。それも、未経験です。」

「・・・まあ、誰だつて最初は未経験なもんだ。とりあえず、どの持ち場が適しているか見てみよう。」

そう言つて、タリムさんに言われるがまま俺は色々な事をやらされた。

しかし、そのどれもがタリムさんはもちろん、俺ですら呆れるほどにヒドイ有様で・・・。

包丁を持たせれば、いきなり指を切つてしまい食材をダメにしてしまった。

タリムさんを客役にしたシュミレーションでは、お盆の水をひっくり返すし、注文をとるにしても、この世界では紙にメモる習慣が無いらしくて俺にはとてもじゃないが覚えられない。

この国で生まれ育っていれば、メニューの名前を聞いただけで絵が浮かぶだろうけど、俺は聞き取れるし話せるけど、言葉と実物がリンクしていないのだ。

タリムさんの溜息はイコール俺の溜息でもあった。

まさか、ここまで俺って社会適応能力が無いとは思わなかった・・・  
どうしよう。

これじゃきつと、どの職種にいつてもたいした戦力にならないんじ  
や・・・。

落ち込んで俯く俺を見たタリムさんが、俺の右肩にそつと手をのせ  
る。

「仕方ない。舞闘大会があるから、猫の手すら借りたい忙しさなの  
は確かだからな。」

「・・・雑用係ということでもいいなら雇ってやるから。」

えっ！

ほ、ほんとに?!

ガバツと体を起こした俺は信じられない思いでタリムさんを見た。

だってさ、どう鼻屑目に見たって、俺なら雇わないって思ったくら  
い使えない人間なのに。

なんだか、この国の人達って・・・優しいよな。

「は、はいっ！ありがとうございます！一生懸命頑張ります！」

ペコペコと何度も頭を下げる俺に苦笑しつつ、タリムさんはじゃあ  
明日の朝、リアと一緒に来てくれと言っ。

やったよ。

俺は、タリムさんと別れた後、厨房にいるリアに向かって指で輪を  
作り、オーケーサインを送る。

さつきから、リアは自分の仕事そつちのけで俺の失敗をハラハラと  
見ていたので、大丈夫だった事を知ると破顔した。

うつすら涙まで浮かべている。

そんなに心配させるほど、俺の使えないっぷりがヤバかったのだと  
思うとホント申し訳ない。

これから、やっていけるのか不安もあるけれど、俺は異世界ガラキ  
スタでなんとか人並みの生活を始めた。





## 7・誤りを解くのは義務だと思う

ガラキスタにきて早、5日が過ぎた。  
俺はタリムさんの好意で何とか店で働かせてもらっている。

が、相変わらず失敗ばかりで、接客はおろか調理場にも立たせてもらえない。

フロアーのリーダーであるムズソフさんがなぜか俺を気にいつてくれていて、その所為かイジメられることはなかったが、面白くないと思っっているヤツもきつといるに違いない。

エオリアとは、今だ会えていないが、俺は心の中ではそれを歓迎していた。

だって、エオリアと会えるということはこの国を滅ぼさないといけないという事だから。

俺の生活は、リアの家とこの食堂しかない狭いものだけど、それでもこの国を滅ぼさなければいけないほど悪い国とも思えないし、滅ぼしたくないと愛着すら出てきている。

リアは、日々をかさねればかさねるほどすごくいい子だと思う。

歳は俺より2つ年下だった。

両親はいなくて、幼いころからシロばーちゃんと一緒に暮らしているのだそうだ。

シロばーちゃんは、てっきり俺の中では現役を引退して家の仕事をしているのかと思っっていたら、ちゃんと働いていた。

日本で言う助産師で、町にも数えるほどしかいない貴重な人材なのだそうだ。

一人の助産師は、大体1キロ四方の家の出産の面倒をみるらしく、今は妊娠している女性が一人しかいないそうであらしい。

忙しい時には、リアも手伝ったりするそう。

俺もできることなら手伝いたいけど、食堂での働きをみるかぎり、自分でも足を引っ張るだけのように思えてならない。

そーいえば、食堂で俺ができる仕事が見つかったのだ。  
昔から理数系だった俺は計算が速いという特技で会計係となった。  
この国では、コンピュータなどというものは存在しなくて、計算  
するための機具と言えばそろばんに似た計算機だけ。  
俺が暗算した方がよっぽど早い。  
タリムは、情けで雇った俺の特技に大助かりらしくて俺としては役  
立たずの無能な人間にならなかった事にほっと胸をなでおろしてい  
た。

そんなある日の昼過ぎ。 。  
昼のピークが過ぎて店内はがらんとつかの間の休息ムードになって  
いた。

この食堂は、ランチの時間と夜の酒場と化する時間のみ開店している。  
食堂は本当に繁盛していて、昼時は戦場のようだ。

「おしつ。アキも休憩に入っでいいぞ。」

フロアーを仕切るムズソフさんに声をかけられる。

「はいっ。行ってきます。」

店の入り口近くにいた俺は、遅い昼食を取るためにまかないのある  
厨房へと行こうとした。

そこへ、薄汚れたボロを着た人物が入ってきた。

ものすごい異臭と、服とも言えないような布を体に巻いているだけ  
の様子。

髪も伸び放題で、顔は髪に埋もれてしまっている。

俗に言うホームレスってやつかな？

俺は扉から離れてそのホームレスを見つめた。

「こらっ！ここは、お前の様な卑しい人間のくる場所じゃないっ！  
出ていけ！」

ムズソフさんが、ホームレスの姿を見た途端その人物を店の外へ突

き飛ばした。

ホームレスは、抵抗も出来ずにそのまま店の外へと転がる。

「あっ……」

俺は目を見開いてムズソフさんを見た。

「ん？どうした？……もしかして、アキは初めて見たのか？

あれは堕ちた娼婦だ。触ると病気がうつるぞ。」

そう言っつてムズソフさんは、手を洗いに行っつてしまった。

取り残された俺は店の外に蹲るホームレスから目を離せなかった。

なぜならば、リアに拾われなかったら俺だつて、ホームレスの人と

変わらない生活をしていた可能性があるわけで、とても他人事とは思えなかったからだ。

やがて、ホームレスはのろのろと立ちあがって店の裏へと歩いて行

った。

俺は、フロアーにいる人に休憩に行くと言っつて、裏口へと向かった。

俺は、フロアーにいる人に休憩に行くと言っつて、裏口へと向かった。

急ぎ裏口へ、自分の分のまかないを持つて俺は向かった。

何もできないけど、何か自分にできることがあるとすればこれぐら

いしかない。

厨房を抜けて奥にある裏口の扉を開けた。

「あ……リア……」

扉を開けた先にいたのは、ホームレスな娼婦に食料を渡しているリ

アの姿だった。

娼婦は、ペコリと頭を下げ去つて行つた。

「アキさんに見つかっちゃいましたか……」

この事、他の人達には黙つててくださいね。」

リアはそう言っつて、俺を店内に戻した。

色々聞きたいことはあったけど、今聞いても答えてはくれなさそうな雰囲気には俺は自分のまかないを手にしたまま、厨房へと戻った。

その日の帰り道、俺とリアは二人で夜道を歩いていた。

「今日の娼婦のことなんだけど・・・」

俺が口を開くと、リアは正面を向いたまま口を開いた。

「娼婦はこのエルアーダで最も卑しい職業と言われているんです。

・・・けど、娼婦の人たちだって生きる為に仕方なくその職業をしているわけで・・・

職業に貴賤はないと思います・・・」

リアの優しさは、身分とか状況とか関係ないんだって事に俺の心は温かくなった。

道で倒れてた俺をわざわざ助けてくれたのも、娼婦に食料を渡したのも、リアにとってはごく普通の事なのかもしれない。

「リアって・・・キレイすぎるよ。」

俺は言う。

「アキさんっ？キレイって・・・そんなお世辞言わなくていいですよ。」

俺の言葉が足りなくて、リアは自分の外見を褒めたと勘違いしている。

実際、リアの外見は愛嬌はあるがお世辞にも美人とは言えない。

けど、俺にはリアが女神のように輝いて見える。

エオリアよりも俺には魅力的に見えるんだからしょうがない。

「リアは、外見もかわいいと思う。中身はもっといいけど・・・」

リアは、横を歩いている俺に信じられないという顔を向ける。

俺は、リアを口説いてるつもりはなくて、ただ思ったまますを口にしただけだったのだが・・・。

翌日、俺とリアはいつものように店へと行った。  
昼の嵐をどうにか乗り越えて、俺とムズソフさん達は休憩しよう  
と後片付け中。

俺は洗い物や汚れものを裏口へと運んでちょうど戻ってきたところ。  
そんな中、準備中の札も意に介さないまま、扉がダーンっと開け放  
たれた。

「お客様、今は準備中となっております……」

ムズソフさんが突然の客にも落ち着いた対応でお引き取り願おうと、  
相手の顔を見て動きを止めた。

各々で片づけをしていた俺達は、ムズソフさんが客を外に出さない  
事に、何とはなしに視線を向けた。

そこに、偉そうに仁王立ちしているのは………人の姿を  
したエオリアだった。

「ここに最近、背が低く、足の短い、黒髪のパっとしない男が働い  
ていると聞いたんだが……」

相変わらずの造りものみたいな完璧な美貌で、ムズソフへと声をか  
ける。

そして変わらない、ひどい言い草。

ムズソフさんは、接客に慣れているにも関わらず、あんぐりと口を  
開けてエオリアを見つめた。

時間にしたら僅か数秒だったが、驚くくらいにムズソフさんは動揺  
している。

「黒髪？ああ……それなら……」

ムズソフさんが俺を見る。

えっ……

皆の視線を一身に受ける俺。

エオリアも、視線を追って俺を視界に止めた。

ひいっ！

ギクリと身をすくませる俺に向かってエオリアは、誰もがうつと見惚れる笑みを浮かべた。

コ、コワイ……。

「やつと見つけた。世話をかけさせるな。」

なんとか、喉から言葉を絞り出さなければ。

厨房からの視線が痛い。

チラリと後ろを見れば、リアがこちらに顔を向けていた。

「えっ、あっ、ど、どうしたんだ？お前、その格好は？」

エオリアの元へ嫌々ながら近寄った俺の目には、えらく煽情的な衣装を身にまとったエオリアが立っていた。

お前はドラクエの踊り子か？

エオリアは、自分の格好に視線を落としてから再び俺を見た。

「ん？……そういえば、主の前では裸だったな。」

ムズソフさんが俺の横に立ってビクリと反応する。

「なに？は、は、裸だとう！」

睨み殺さんばかりに、俺をにらみつけるムズソフさん。

コ、コワイデス……。

「……その、誤解を招く言い方はやめてくれ。」

「誤解？服を着ると泣いてすがつたのは主だったろう？」

元が獣なだけに、服の圧迫感が気になるらしい。

夏の暑い時やるみたいに、胸元を指で広げている。

「全裸の女性に、泣いてすがつたのか？！」

もう、俺はムズソフさんの刺されんばかりの眼光に泣きそっだ。

リアのいる方向からも冷たい視線が突き刺さる。

いやだ。

ホント、泣くぞ俺。

「いやっ、そのっ、俺とこいつはそーゆー関係ではなくてですね……」

「うむ。我は下僕で、こやつは主人。絶対服従の関係だ。」

ブチンッ！

俺の心の堤防が決壊したよ。

「なにいつ!!」

ムズソフさんが俺の胸倉を掴み、持ち上げる。

190を優に超えるムズソフさんに対して、165?の俺は子供み  
たいなもので抵抗のしようもない。

「ちがつ!・・・何言つてんだよ、エオリア。止めてくれ!」

「分かった。」

エオリアはそう言うと、俺を掴んでいたムズソフさんごと、背負い  
投げの要領で投げ飛ばした。

床に叩きつけられる俺とムズソフさん。

「いつてえ・・・。」

泣きながら俺を投げ飛ばしたエオリアに視線を向けると、エオリア  
は無表情で俺達二人を見下ろしていた。

もう、なんで俺がこんな目に合わなくちゃいけないんだ?!

「この店の責任者はいるか?」

エオリアは、しんと静まった店内の誰にもなく言う。

奥から、タリムさんが慌てて出てきた。

「お客様、いかがでしたか?」

「騒がせてしまって、すまなかった。・・・実は、折り入って頼み  
があるのだが・・・」

どこまでも偉そうな口調を崩さずに、エオリアはタリムさんに言う。

「なんででしょう?」

「・・・私も、この店で雇ってはいただけまいか?肉体労働でも、  
なんでもするので頼む。」

頭を下げるエオリアに、タリムさんは困惑顔。

どうしたらいいものやら、考えあぐねているのが分かる。

「タリムさん!絶対に雇ったらダメですっ!」

俺は、絶叫に近い声で叫んだ。

「店長!ぜひ、雇ってやってください!」

俺の叫びに被せるように声を挙げたのはなんと、投げ飛ばされたム



ズソフさんだった。

なんでっ！

大男を投げ飛ばす凶暴な女ですよっ？！

タリムさんは、ゆっくりと頷いた。

「分かった。採用しよう。」

な、なんでだよおっ？

俺は、声を張り上げ過ぎて意識が遠のく中で繰り返し問い続けた。

## 8・序章はここまでです。

「主よ、これを持っていけ。」

そう言つて渡されたのは、いつぞやの仮面だった。

食堂で気を失つた俺は、従業員用の休憩室に横たえられていた。

目覚めるとエオリアの顔が視界いっぱい飛び込んできて、俺は慌てて体を起こした。

「主が飛ばされた時に落していった。これを持って飛ばされてれば、こんなに時間もかからず主を見つけ出せたのだ。肌身離さず、持ち歩くのだぞ。」

なにっ？

こんなかさばる物を持ち歩けと？

「普段はこれに入れておけ。」

そう言つて取り出したのは、シルバーチェーンのネックレス。

先には、ロケットのようなものが付いている。

エオリアに促されるまま、俺はそれを手にした。

これに入れるって？

「仮面を使う時には……汝、仮面の封印を解放せよ！と叫べばいい。」

逆になってしまう時には……汝、仮面よ封印に戻れ！と言え。」

おおっ。

コンパクトに持ち運べるのか。

よかった。

「汝、仮面よ封印に戻れ！」

俺は、さして力む事もなく口に出してみた。

手にしていた仮面が砂のようにサラサラとその姿を消してしまった。

これでほんとに、ネックレスの中にはいったのかな？

結局、俺は今まで通りリアの家でお世話になるし、食堂でも働かせてもらつのは変わらない。

エオリアは、ウエイトレスとして働くそうだ。

あの偉そうな口調でか？！

俺の驚きにエオリアは、ニヤリと笑う。

「我は、神の力を少しは持っていてな。その1つに魅惑の力というのがある。」

「魅惑の力？」

「主には効かないが、我を見た者で僅かでも我に好意を持った者を虜にできるという力だ。」

うへえっ！

それでなのか！

モゾソフさん！

「まあ、そんなわけだ。我は人型ですつといるのは嫌なので夜はいつぞやの丘にいる。…ペンダントは必ず常に身につけておけよ。」

そういつて、エオリアは休憩室からドロロンつと消えた。

急に静まりかえる休憩室。

しばし呆けていた俺は、我に返る。

「あゝっ！あいつ、モゾソフさんとかに誤解解いていったのか？！」

……………ないな。

どーやって説明すりゃいいんだよ。

俺は、目覚めた早々、頭を抱えた。

よるよるしながらも、フロアーに戻ると皆の視線を一身に浴びた。  
うっ。

けど、これから夜の準備がある為に、その話しをしている暇はない。

「すみません、遅れました。」

モゾソフさんに声をかけると再び睨まれた。

完全に俺に敵意剥き出しなんですけど。

その日の俺は、皆に当たり散らされてまさに散々だった。

閉店を迎えた店内で俺は今、皆の質問攻めにあっている。

「エオリアさんとアキはどういう関係なんだ？恋人か？」

モゾソフさんが、訊いてくるのに俺は首を横に振る。

「エオリアは、好きな人に頼まれて、断れずに俺の面倒を見ているだけです。」

「そ、そうか。好きなヤツって男か？」

「…多分」

モゾソフさんがガツクリとうつ向く。

「そうだよな。あんな素敵な人に恋人の一人や二人、いないわけないよな……。」

俺は、がっくりしているモゾソフさんに声をかけることもできず、早々にその場を後にした。

帰り道はリアの質問攻めが待っているかと思うと、更に気が重い。

けど、誤解だけは解いておきたい俺は、帰宅準備をしてリアが店から出てくるのを今か今かと待っていた。

「……遅いな……。先に帰ったのか？」

リアの方が帰りが遅いので、いつも俺が先に店を出てリアが出てくるのを待っているのだが、この日いつまで待ってもリアが出てこない。

俺は、心配になって店に戻ろうとした。

「きゃあああああぁぁぁっ！！！！！」

響く悲鳴。

聞き覚えのある声に似ている。

「リア?!」

思わず俺は、悲鳴の聞こえた方角に向かって走り出した。

悲鳴が聞こえたのは店のすぐ近く。

俺がいくつかの角を曲がると、ちょうど行き止まりにぶつかった。そして、そこに広がる景色に俺は血の気を失う。

「あ……あ……あ……」

あの時の娼婦だ。

直感的にそう分かった。

血まみれで倒れている人間。

倒れた身体から、今だに流れる黒に近い液体。

そして、その場に残されたリアがいつも持っていた、見覚えのあるカバン。

俺は、無意識に首から下げたネックレスのロケットを握りしめた。

「汝、仮面の封印を解放せよっ！」

## 9・平穩こそ望むべきもの

俺は意を決し、ペンダントを握りしめて叫んだ。

「汝、仮面の封印を解放せよ！」

ペンダントが光り、ロケットを握っていた右手にはいつの間にか黄金に輝く仮面があった。

仮面を顔に合わせるだけで、紐も何もないその仮面は落ちることなく、顔に吸い付いた。

途端、まばゆい光と共に俺の意識は微睡みの眠りへと吸い込まれていった。

「エオリア。今すぐここへ。」

闇夜に凜と響く声。

数秒前まで生島秋久がいた場所に立っているのは、涼しげな目元の端正な顔立ちをした男。

身長も、190cmを越えている。

端正でありながらも、しつかりと身体は鍛えられており、腰には細かな細工の入った人が作ったとは思えぬほどの立派な剣を下げている。

黄金でできた鎧の上に純白のマントを纏っている。

3秒とかならぬうちに人型でエオリアが現れる。

「アルギス様！」

「久しいなエオリア。」

魅惑の神レーネと剣の神アストとの間に生まれた闘神アルギスは、

端正な顔立ちではあるが中性的なイメージよりも野性味溢れるワイルドな雰囲気を漂わせていた。

獣の時のエオリアと同じ艶やかな黒髪が夜風になびく。

「少し力が落ちているな……。」

アルギスはエオリアの顎をそつと上に持ち上げて口づけを落とす。

「……あつ……はう……ああ……。」

溢れる喘ぎを止められないエオリアからアルギスは、ゆっくりと唇を離す。

アルギスは口づけでしか自分の力を他の者に与えることができない。しかも口づけられた者は、もれなく快樂の波に襲われる。

これは、同性や不感症であっても例外はなく訪れる副作用のようなものであった。

「リアという娘を助けに行く。王城へ向かってくれ。」

「……はい」

絶頂を迎えた直後のエオリアは、涙目になりながらも神獣の姿へと変化する。

アルギスはエオリアの背にヒラリと飛び乗った。

エオリアは、人の目には追えない速さで民家をすり抜けて、高台にある城へと疾走する。

ここガラキスタは、女王による専制体制の国であり、女王は国でも有数な剣技の使い手でもある。

国の内外から、強き者を金の力で招き傍にはべらせるのを楽しみにしているという。

軍事国家として名高いガラキスタは、この世界では一、二を争う大国となった。

舞闘大会を半年に一度開催するのも、優勝した者を城へめしかかえる為のものだ。

「アルギス様。リアという娘は城にいますか？」

エオリアはスピードを落として城内の広々としたテラスに着地する。

「ああ。娼婦殺しの犯人と共にな。」

アルギスがエオリアの背を撫でて、飛び降りる。

「!!!」

アルギスの背後から気配もなくきりつけられる刀身。

髪一重の隙間を開けて、アルギスは無駄のない動きでそれをかわした。

「ほう。誰の差し金かは知らぬが、なかなか腕の良い間者をやとつたな。」

振り返ったアルギスの目にはいったのは、夜着を身に纏った女。

ドレスと剣の組み合わせが不釣り合いではあったが、女の顔には強者に会った悦びの笑みが浮かぶ。「……女王自ら相手をするとは……」

アルギスは、獰猛な笑みを浮かべる女王とは対照的な微笑みを浮かべて腰に提げた剣の柄に手をかける。

と、残光を残して剣は女王の首もとへと移動していた。

人の目ではついていけないスピードでアルギスが女王の首に剣をつきつけた。

「っ!!!」

驚愕に目を見開く女王。

剣を鞘から抜く瞬間すら分からなかった事に、衝撃で動けない。

「私は、女王に用があるわけではない。」

アルギスが言うのに女王は眉間に皺を寄せる。

「何？私の命が目的ではないのか？」

「ああ。町で無力な娼婦を一方的に惨殺した男がこの城にいる。」



私が求めるのは、そいつの命のみ。」

「何！？娼婦を？」

女王は、強い者が好きだが、弱者を虐げる事を良しとはしない。娼婦を殺した者が城内にいる事に奥歯をギリリと噛みしめる。

「私も連れていけっ！」

女王はアルギスに詰め寄る。

「ほう……」

アルギスは女王の反応に少し驚きつつもニヤリと口角を持ち上げた。

「いいだろう。案内を頼む。……場所は地下。」

法力を扱える器量の者がいる場所に心あたりはあるか？」

「法力？ならば、ギスザツクのいる地下の法力研究室に違いない。」

ついてこいっ！」

女王は、怒りを込めた瞳でアルギスから部屋へと顔を向けた。

ローブを夜着にかけて女王は部屋を出た。

見張りに立っていた騎士二人が女王の後に続く一人と一匹に驚きふためく。

「アンミラ様！こやつらはっ？！」

「剣を抜くな。今からギスザツクの元へ行く。兵を何人が呼んでこい。」

腰に提げた剣を鞘から抜こうとした騎士を女王は止める。

それを見たアルギスは、女王に言う。

「いや、兵は結構。今回に限っては、女王アンミラの身は、例え一万の兵に狙われようと傷ひとつ負わずに帰すと誓おう。」

「アンミラ様を呼び捨てにするとはっ！」

騎士の一人が噛みつくがアルギスは特に気にするでもなく女王から目をそらさない。

「……分かった。お前たち二人だけついてこい。さあ、行くぞ。」

見張りの二人を部屋の前に待たせる事は彼らの職務からすれば責任問題となってしまう為、女王は二人と一緒に連れて行くことにした。

アルギスは何も言わずに女王の後ろに続く。

女王の前に一人、アルギスと獣姿のエオリアの後ろに一人、騎士達も急ぎ足で進む。

一階へと降りて、庭を横切り別棟へ。

地下へと続く扉は開けた途端、独特の匂いが立ち込めていた。

「むっ！これは…」

「血の臭いと…麻薬草か…」

アルギスが言う麻薬草は、エルアーダでは栽培の禁止されている植物で、その葉を乾燥させて燃やした煙を吸うと感覚が麻痺して幻覚を見るところのものであった。

女王は、人々を怠惰に落とす麻薬の類いを嫌い、医術以外での使用は許可してはいない。

「ここからは私と女王だけで行く。」

アルギスがアンミラの前に出て先を進む。

「なにっ？アンミラ様を中に連れて行くのか！？麻薬草の香りがここまで匂うのだ、外で待たせておくべきだろう！」

騎士の一人が、アルギスに向かって怒鳴る。

普通に考えれば騎士の言い分はひどく真つ当である。

「外では身の安全が保障できない。大丈夫だ。麻薬草は女王に効かない。」

「なっ。なんだと!？」

女王の驚く声にも答えず、アルギスは女王を見つめる。

「どうする？来るなら手を取れ。」

女王の前に右手を差し出す。

「…不思議な男だな。よかろう。」

そう言っ女王は男の手を取った。

アルギスは、女王が手をのせた瞬間、そのまま手を掴んで引き寄せると女王に口づけを落とした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4537k/>

---

あなざー さーちんぐわーると（改・灰かぶりの英雄譚）

2010年10月10日08時05分発行